教界ニュース

日本伝道会議1年前 15プロジェクトで課題浮き彫り

来年9月21～24日に札幌市で開催される第5回日本伝道会議（JCE5、原田憲夫実行委員長、中島秀一大会会長）を前に、1年前集会「JCE5フォーラム」が9月8、9日、埼玉県嵐山町で開かれた。15のプロジェクトのチームメンバーらを中心に96人が参加し、各テーマについて話し合い、各チームの内容を発表した。

プロジェクトは伝道会議の会期中2日間にわたり午前中、同じメンバーが同一テーマについて議論を深める。参加者は登録する。今春、核になる各数人ずつのチームメンバーが選ばれ、テーマや内容について話し合いを始めている。過去4回の日本伝道会議にはなかった試みで、主題講演や分科会だけでは質疑応答で終わってしまい、具体的な伝道の課題について議論が深まりにくいとの反省に基づき、伝道会議前からメンバーを決めて議論を重ね、会期中の討議を踏まえて、その後も同じメンバーが日本伝道の諸問題を継続的・具体的に担っていくことを目指している。

発表された各プロジェクトのおもな討議内容は次の通り（カッコ内はリーダー＝敬称略）。

【宣言文起草】（岡山英雄）今回テーマ「危機の時代における宣教協力」に沿い、前回「和解の福音」を中心にした沖縄宣言を深め、平和の民として一致して具体的に生きる道を探る。プロテスタント宣教150年を振り返り、次の伝道会議までの10年を見通して方向性を出す。

【日本宣教】（西岡義行）日本文化に福音が浸透していない問題に対応し、文化に対して対決型だった従来の教会のあり方を超えて日本文化と取り組む新しい可能性を探る。

【地方伝道】（藤原導夫）今日における地方伝道の実情と課題について考察分析し、どう切り開いていくのかを検討する。

【地域的宣教協力】（三川献児）各地域の宣教協力の現状と課題を検討し、望ましい方向性を探る。教会リーダーの養成、無牧教会への協力、シングルの親への協力、経済的協力などが今日的課題。

【教会・教団間協力】（畑野順一）昨年JEA宣教セミナーで各教団教派の宣教担当者が話し合い、教派間の連絡会的なものが必要だとJEA理事会に要望を出した。その流れを受け、各団体の計画を分かち合い、参加者に情報を提供する。

【信徒活動】（玉井邦美）教会における信徒の活動と役割を聖書から正しく認識し、推進する。

【世界宣教・ディアスポラ】（永井敏夫）海外に滞在する日本人と帰国者、日本に滞在する外国人の宣教協力の現状を調査し、協力関係をつくる連携を探し出して提示する。

【環境】（住田裕）環境問題を引き起こしているのはキリスト教という主張に反論する。多くの問題のどれに取り組んだらいいか整理している。

【社会・平和】（荒川雅夫）「和解の福音に生きる」ことは戦争と平和の問題にとって信仰と別の社会問題でなく、私たちが宣べ伝える福音が戦争の時代に問われるとの問題意識で、過去の弾圧の歴史や教会と国家の問題を振り返り、現代と未来に向けて平和をつくっていく。

【共生】（阿倍信夫）障害者、高齢者など社会福祉に関する問題を整理。心の病など多くの問題を抱えている人々を迎える教会のあり方を考える。

【こども】（錦織寛）家庭崩壊や学校現場の混乱、道徳・価値観の変容、情報の氾濫（はんらん）など、今の時代に子どもの抱えている危機を検証し、教会が子どもにどうかかわり仕えていけるかを語りあう。

【家庭】（八木橋みどり）夫婦を取り上げ、「和解の福音」を家庭内の関係でとらえる。世にある家庭の痛みの問題に教会がどうアプローチできるか、教会内の家族の問題も取り上げ、聖書的な家族のあり方を提示する。

【青年】（三橋与志哉）聖書から青年宣教を学び、青年によるパネル討論、青年の働き紹介、牧師と青年のグループ分かち合い、青年牧師ができることについての提言など。

このほか【プロテスタント宣教150年】（山口陽一）では宣教の歴史を回顧・検証し、そこから学ぶ宣教の方策を提言。【女性】（丸山園子）では宣教における女性の働きについて準備中。

1年前集会では各プロジェクトの発表を受け、活発な意見交換をした。プロジェクト間で重なる問題も多く、笠代照夫企画推進プログラム局長は、互いの情報交換をしながら進めてほしいと要望を述べた。事務局（石田敏夫事務局長）では、伝道会議に向けて各教会からの提案や意見をメールで受け、各プロジェクトに振り分ける。

事務局メールアドレスは以下。Jce5office@jeanet.org

【根田祥一】

オリッサ州迫害に同盟基督が抗議声明
祈りのアピールも

日本同盟基督教団は、インド・オリッサ州で起きているキリスト教迫害に対し9月14日、「オリッサ州、インドのクリスチャンに向けた暴力に対する抗議」文を、同教団理事長・中谷美津雄、社会局長・水草修治の連名で、在インド大使館のヘマント・クリシャン・シン特命全権大使あてに送った。

抗議文では、国内外の複数のニュースから「ヒンズー教原理主義者の武装勢力が相次いで教会とクリスチャンの家に放火、人々を陵辱・虐殺し、300以上の教会が破壊され、数十人が殺害され、約5万の人々は野獣と毒蛇の住む危険な森に避難していること。しかも「インド政府と警察はその惨状を傍観していた」とし、「このような野蛮な状況を放置すれば、偉大な文明の伝統ある貴国の品位と国際的信用にかかわります」と警告。すみやかに政府と警察が逃れたオリッサ市民を保護するよう強く勧告した。一方、インドのマンモハン・シン首相がオリッサでの暴力解決を始めたことを高く評価し、「その迅速で適切な動きのため祈ります」と結んだ。

同教団では、①一日も早く迫害がやむように、②インド政府・警察がすみやかに暴徒を鎮圧するように、③クリスチャンたちが暴力の連鎖に巻き込まれず、悪に対し善をもって勝利できるように、と祈りを呼びかけている。

現代日本の教会の実情を知る

シリーズ教会ルポ　No.25

専任牧師がいないから自分が働かなければと

前回、専任牧師がいない教会で「閉塞感がある」と答えた教会を紹介した。今回は無牧状態にもかかわらず「閉塞感がない」と答えた教会に焦点をあてたい。

アンケートの中で「専任牧師がいない」と答えた教会は18件。うち「閉塞感がない」と答えた教会は7件あった。

理由を見てみると、「信徒が聖書信仰に生きている」、「教会員の多くが心の目を神様に向けている」、「信者一人ひとりが救われた喜びと感謝をもって集会に参加している」、「教会内に活気がある」など。専任牧師がいなくても、信徒の内にある喜び、感謝、信仰生活の充実が「閉塞感を感じない」理由となっているようだ。

滋賀県甲賀市信楽（しがらき）町にあるキリスト伝道隊信楽キリスト教会は10年ほど前から専任牧師がいない状態。だが、日曜礼拝、祈祷会、教会学校を毎週行い、また夕礼拝、聖書の学びをし、特別伝道集会も一教会で催すなど、様々な集会を活発に行っている。それができる理由は、教派を超え外部から複数の牧師がメッセージや聖書の学びのため来てくれること、教会員が伝道熱心なことだ。同教会員の大橋宣子さんは「聖霊に満たされたら、喜んで主のわざに参加すると思う」と語る。

専任牧師を迎えられないのは経済的理由のためだと大橋さん。「将来的には専任牧師を迎えたい」と語る。

経済的理由で牧師を迎えられない

秋田県秋田市河辺畑谷にある日本ルーテル同胞教団河辺家の教会は、14年前から同教団のメンバーである和田章、睦子夫妻が自宅を開放して教会を始めた。現在礼拝出席者は20人ほどで、子どもを入れると30人にもなる。妻の睦子さんは「小さな森の中にある教会で、環境も良く、子どもたちは教会に集うことが大好き。親たちもゆっくり交われる」と語る。

同教会には大曲教会の片桐進牧師が2か月に1回、日曜午後に礼拝説教に来てくれるのみで、ほかは章さんが主に聖日礼拝のメッセージをしている。章さんは神学校で聴講しながら勉強してきた。

同教会は専任牧師がいないにもかかわらず、6人1家族から25人に成長した。昨年2家族が転居のため他教会に移ったが、教勢としては「のびている」という。

その理由の一つに「信徒に不満がない」と章さん。「スタート時点から牧師がいないので、みな自分でやらないといけないという意識があるのだと思います。牧師がいると逆に牧師任せになって、そういう意識になかなかなれないのではないでしょうか」

また、「牧師がいないので経済的には楽」だとも。出費は2か月に1回、説教に来てくれる片桐牧師に謝礼を渡す時ぐらいで、牧師を経済的に支えるという負担が少ないという。だが「いつになるかわかりませんが、将来的には専任牧師を迎えたい」と語る。

大阪府箕面市栗生外院の日本イエス・キリスト教団箕面希望教会は、昨年4月から無牧状態に。今年春から同教会の信徒5人が池田市にある同教団の池田中央教会（鎌野善三牧師）に合流し、一緒に礼拝を守っている。そのため箕面希望教会は現在、伝道所という形をとり、聖日礼拝はしていないが教会学校や三浦綾子読書会が行われているという。

しかし、鎌野牧師は「伝道していけば必ず道は開かれる」と信じ、「閉塞感は感じない」と語る。「現実は全然伸びていないかもしれない。でも原因が分かっているので閉塞感はない。信徒が成長すれば、教会も成長する。そのために箕面の信徒5人が池田中央教会の礼拝説教を聞いて養われている」

今までの会計、教会備品などは別に保管し、箕面希望教会の再起に備えている。

世界の飢えた人々に食糧と愛を
・里親募集（月4,000円）
・海外ボランティア募集
日本国際飢餓対策機構
http://www.jifh.org/
献金の振込は、郵便振替 00170-9-68590
〒581-0032 大阪府八尾市弓削町3-74-1 ☎072-920-2225

落ち穂

明治から大正にかけて日本の産業界の中心的存在は製糸業だった。その労働力となったのが若い女子工員であり、その過酷な労働状況は『女工哀史』というルポに克明に記されている◆一方で例外的な企業もあった。明治26年創業の石川製糸である。埼玉県入間市にあったこの工場は創業3年で4千人を超える女子工員が働き、彼女らは家族のような待遇を受け、結婚で退職する女性には嫁入り道具まで持たせたという◆創業者・石川幾太郎はクリスチャンだった。今も残る武蔵豊岡教会は幾太郎が土地を提供し完成した。500人収容の大会堂は、日曜日ごとに女子工員で埋まったという。我が国の労働史の中で、この労働者の人権を守った経営方針は決して小さな事例ではない◆このほど新生宣教団から発行された地域限定トラクト「入間・狭山・川越」編はこのような地域で起こったクリスチャンの証を中心に構成されたカラー14ページの小冊子だが、地域にこだわって福音の魅力を伝えるという企画は新鮮である◆来年プロテスタント宣教150年を迎えるが、地域宣教の歴史の中から神の恵みの大きさを再発見することは大きな課題といえる。